日火災のため焼失してしまった。明治初年の神仏分離の際には、竜宝寺４５世永憲は帰正して大崎清美貫寛と改め、大崎八幡の祠官となった。その他の社僧６名も帰正して神職となっている。

注(2) 王城附近の地をいう。わが国では、歴代の皇居が置かれた大和・山城・河内・和泉・摂津の５か国、即ち５畿内。和泉が河内から分離して分置される以前の奈良時代までは４畿内といった。

古くから支配者貴族階層の本拠地であるので特別優位性のある地域とされた。これに対しその他諸国を「外国」〔げこく〕と呼んだ。この外国〔げこく〕は現代的な意味での外国〔がいこく〕ではない。

注(3) 畿内と同じ意味であるが、この場合は近畿地方の略で、京都・大阪・滋賀・兵庫・奈良・和歌山・三重の２府５県の区域。

資料 仙台の年中行事（仙台市産業部編）

郷土の伝承（宮城県教育会編）

仙台の方言（土井八枝）

106 「やまい送り」の行事

問 戦前まで「四百四病送れ、送れ」という行事が行われていたそうですが、どのような行事ですか。

答 旧暦３月１５日に行われた民俗的な年中行事で、仙台地方では「やまい送り」・「こど」・「こどまつり」・「うめわかのこと」などと称していました。これについて「仙台の方言」（土井八枝）に次のように記されています。

『こど・こどまつり　三月十五日やまいおくりの行事』

『やまいおくり　これは「こど」とも言ひ、疫病除の行事である。三月十五日、葉のついた細竹の枝に白や草の餅をまぜたりして七つ、五つなどつけ、半紙を二つ切にした一枚に「四百四病おくるおくるおくる（……おくれおくれおくれ、とも）」と認めたものを結びつけ「こどは一人でするもんでないから外さ出せや。」と言って門に立てる。大抵は犬などが咬へ去るのであるが、すると疫病をはらったとよろこぶのである。

この餅は「こどもち」「うめわかごとのもち」などいふ。片平丁に通称「ごとわさん」とよぶ政宗公愛馬、牛頭をまつる社があり、三月十五日に祭る。また「うめわかごとのもち」については、謡曲隈田川に人買商人につれられた梅若丸[(1)]が隅田川のほとりで病死し、遂に「遺言に任せ墓所を構

へ、標に柳を植ゑて候……」「のう、舟人、今の物語はいつの事ぞ。去年三月十五日、しかも今日に当りて候。さてその児の年は。十二歳。主の名は。梅若丸……」といふ。いつか三者〔病送り、政宗の愛馬午頭、梅若丸〕の聯関を解いてみたいものである。』

この行事の主体をなすものは、農耕儀礼の一つである「こど」といわれる祭り行事であります。旧暦即ち農業暦の3月の満月の頃は、厳しい冬が漸く終り万物萌え出ずる春を迎えようとする季節であります。やがて農耕を開始するに当って、田の神に豊穣を祈ることが「こど」と呼ばれた祭りの行事であります。また、永い冬ごもりの後で病気が多発する季節の変り目でもありますので、耕作に励むための健康をも併せて祈願したのです。この「こど」に謡曲の梅若伝説が混入したのは、中世末以降であります。これは主として関東・東北一帯に広く見られる形であります。雪解け水で河川が次第に増水し、徒渉しなければならぬことの多かった昔は、水難の多くなる節ですので、隈田川のほとりで最期をとげた伝説の貴公子の霊を弔い、水の災難を免れようとの祈願が抱き合わされたものです。その後仙台地方ではこの複合行事に、更に政宗の愛馬五島伝説がミックスされ変形したものが行われて、最近に至ったのであります。これは本来の「こど」と「五島」の名が同音であるため混同癒着してしまったもので、本質的な意味は全くありません。

このように、異質な三つの要素の混在する行事ですので、県内でも地域によりそれぞれ次のような差異が見られます。

1. 「仙台風俗志」（鈴木省三）

『三月十五日　梅若丸が凶漢の為に「問ふ人のあらは答へよ都鳥 すみた川原の露と消えぬと」と一首の歌を遺して隈田川のほとりに空しくなりし日なりとぞ。これを愍み笹竹の枝に餅を挿て門に立て弔ふなり。追廻し五島（後藤ともいふなり）が墓の弔日なり。今は良覚院丁に移され蛎崎馬上（かきざきばしょう）神社といふ是なり。』(2)

2. 「仙台」（小倉　博）

『（旧）三月十五日　梅若のこと　笹竹の枝に草餅を附け「四百四病おくれおくれおくれ」と書いた紙をさげて、家の側などに立てる。』

3. 「仙台の年中行事」（仙台市産業部編）

『三月十五日　疫病送　笹竹の枝に餅をはさんで「四百四病おくれおくれおくれ」と書いた紙をさげて門前に立て、後ち川に流す。』

4. 「仙台方言」（藤原　勉。「仙台市史」第6巻の内）、「方言民俗語彙」（藤原　勉。「宮城県史」第20巻の内）

『うめわかこと旧三月十五日 の行事で、笹竹に草餅をつけて病送りをする。三月十五日に死んだという梅若丸の伝説と、三月十五日に死んだ伊達政宗の愛馬後藤黒（午頭墓〔ごとはか〕さまとして祭られている）のことと、農家で三月十一日から十六日まで田の神を祭るいわゆるコトとの混習らしい。』

5. 「童戯・童詞」（天江富弥。「宮城県史」第２０巻の内）

『梅若　三月十五日には、笹の枝に草餅をつけ「四百四病送れ送れ送れ」と書いた短冊を結びつけ戸口に飾る。仙台ではこれを梅若の事という。』

6. 「年中行事」（三崎一夫。「宮城県史」第２１巻の内）

『梅若さま・ゴトウの餅　十五日、「梅若さま」といって餅を搗く。この日について、「梅若さまも春風に、二枚屏風をおし開いて拝む」という言葉がある。〔岩出山町真山〕

昔、伊達さまの馬が食べさせられず痩せて死んだので、ゴトウの墓に供えるといって草餅を搗いて信心棚に供え、この餅を「ゴトウの餅」といっている。〔名取市愛島〕』

7. 「仙台民俗誌」（三原良吉。「仙台市史」第６巻の内）

『三月十五日（旧）　梅若のコトという。昔、梅若丸が人商いにかどわかされて「問う人のあらば答へよ都鳥すみた川原の露と消えぬと」の歌を残して隈田川のほとりで亡くなった日といい伝え、この日雨が降ると梅若塚の涙雨という。草餅をついて小さく千切ったのを笹の枝に着け、紙に「四百四病送れ送れ送れ」と書いて結びつけて門口に挿し、後に川へ送って流す。』

8. 「仙台伝説集」（三原良吉）

『ゴトハカさん

伊達政宗の愛馬に五島とよぶ駿馬があった。大阪夏の陣に出陣する時、五島は老齢になっていたので、出陣の前日、政宗は五島の鼻面をなで「この度の合戦は三百里の長途であるが、その方年老いて長旅のはての合戦は難渋であろうから留守を申付ける」といって聞かせた。五島はそれが分ったか、生きてお役に立たぬなら死ぬがましだと考えたものか、仙台城の本丸を東に馳出して崖から落ちて死んだ。厩の者からの知らせを聞いて、政宗は畜生ながら神妙なやつと、五島を哀れんで、落ちて死んだ場所、追廻の崖下に葬らせ、墓を建ててやった。

それ以来いつとはなしに、この墓にお参りすれば小児の馬脾風（ジフテリアの漢方名）をさけると信じられるようになり祈願をかける者が多くなった。明治になってからこれを良覚院丁に移してゴトハカさんと称した。祭礼は旧の三月十五日、家々で笹に草餅をつけ「四百四病送れ送れ送れ」と書いた紙を下げて門口に立てる梅若のコトの日で、この日、子を持つ親たちは社から出す胡桃と小さな臼杵を下げた腰下げの護符をうけ、また袋にいれた胡桃を持参して、これを袋ごと社前の石段にころがして持ち帰り、子供がバヒフにかかった時、この胡桃を黒焼にして湯をそそいで呑ませると治るといい、社では以前耐久紙の一寸四分ばかりのものに墨絵の馬を刷ったものを出していたが、これを煎じて呑ませると子供の咽喉はれにきくといわれた。

9. 「緑の故里七つ森を語る」（黒崎茗斗）

『病いおくり　〔三月〕二十日「よろづ病い送れ送れ送れ」と短冊に書いて笹竹に結び、団子又は餅を月の数或いは家族の数だけ挾んで屋敷の外に立てて病難を払う。〔黒川郡大和町宮床地方〕』

10. 「年刊民俗採訪」（国学院大学民俗学研究会編）

『三月十五日　子供の餅とて桃の木に餅を上げる。（黒川郡大和町旧宮床村前河原・荒井・石倉地区）

三月十五日　コト送り　青竹の枝に家族数の草餅をつけ家の下手の方に立てる。（同前向原地区）』

11. 「利府村誌」（利府村誌編纂委員会編）

『三月十五日　梅若様または疫病送りと称して笹竹の小枝に餅をつけて「四百四病送れ」と書いた紙を下げて、門前に立て、後ち小川に流した。』

12. 「田尻町史」（田尻町史編纂委員会編）

『旧三月十五日　梅若様―梅若忌　昔、京の北白川の吉田少将惟貞という公家が美濃国野上の長者の一人娘を娶り、一子梅若をもうけた。この梅若が人買にかどわかされて東国に連れて来られ、過労の末、隅田川の畔の柳の木の下で落命した。年僅かに十二才、里人憐んでこの柳の下に塚を建てて梅若塚と云った。この命日が三月十五日である。それから恰度一年経った三月十五日、里人達が塚の前に集って供養しているところへ図らずも梅若の母が、はるばる京から尋ねて来て愁嘆する。以後母が其処へ庵を結んで、終世我が子の菩提を弔った。これが東京の梅柳山隅田院木母寺の起りだと語られている。＜藤原衛彦著「日本伝説研究」に拠る＞』

13. 「唐桑町史」（唐桑町史編纂委員会編）

『三月十六日　「農ずら様の日」といい、春蒔きの種子を持参する農神を祭る日として田畑に出て働くことを忌み慎んで休む。米や雑穀の粉で饅頭をつくり、１６個を農神に供える。』

14. 「日本の民俗宮城」（竹内利美）

『ノウズラサマ　気仙沼地方では三月十六日をイネマキノウズラ、九月十六日をカリアゲノウズラといい、丸い小餅を供える。ノウズラマンジュウ・ジュウロクダンゴ（十六だんご）ともいい、オシラサマアソビの日なので、それにも供える。ノウズラの意味はよくわからない。』

15. 「陸前の年中行事」（東北民俗の会編）

『気仙沼市鹿折鶴ケ浦　オシラサマアソバセ　三月十六日と九月十六日に、部落中の嫁さんたちが当家で祀っている八体のオシラサマのうち二体を持って、町の田畑のオガミサンの所へカミサマアソバセに行く。お金と米一升を供えてご祈禱をしてもらい、部落の一年中のことを占ってもらう。問い口は百円で各家も拝んでもらう。米の粉で平らな形の上に小豆を載せたノウズラサマ饅頭を作って食べる。

栗原郡金成町長根　梅若さま　三月十五日　梅若さまといって団子を供える。その由来は知らずと。

登米郡迫町北浦地粮〔ちろう〕　梅若さま　三月十五日を梅若さまといって、小豆ご飯を炊いて仕事を休む。

玉造郡岩出山町真山小坪　梅若さま　三月十五日を梅若さまといい、餅を搗いて信心棚に供え、仕事を休みにする。「梅若さまも春風に、二枚屏風をおし開いて拝む」という言葉がある。

加美郡色麻村高城　梅若さま　三月十五日を梅若さまといって、餅を搗いて休みにする。

名取市愛島塩手　ゴドウの餅　三月十五日、昔、伊達さまの馬が食べさせられず痩せて死んだので、この日ゴドウの墓に供えるといって、草餅を搗いて信心棚に供える。この餅をゴドウの餅という。』

16.　「年中行事辞典」（西角井正慶編）

『午頭墓祭　宮城県名取郡岩沼町〔現在の岩沼市〕で３月１５日のこと。ゴトの餅というくさ餅を作り神に供える。藩祖公愛馬午頭の故事にもとづくと伝える。この日を梅若ごとという所が、これから関東にかけて散在している。

梅若忌　陰暦３月１５日。謡曲隅田川に作られた薄命の貴公子梅若丸の忌日という。今は４月１５日に東京都墨田区隅田町の木母寺（もくぼじ）〔木母は梅の字の偏と旁とを分けた語で、梅の異称。木母寺とは梅寺で梅若の梅にちなんだ名〕で、開扉を行い、境内の梅若塚で大念仏の供養がある。梅若丸は吉田少将の子で、人買にかどわかされて東に下り、隅田川のほとりでいたましい死をとげたという伝説上の主人公で、貴種流離譚の典型的なものとして人気ある人物である。木母寺の行事以外にも、川崎市などではこの日をウメワカキといっており、茨城県稲敷（いなしき）郡では梅若十五日という。その他、この日梅若あるいはそれと似たいわれによって行われる行事は東日本の所々にある。それらの全体が梅若伝説に伴うものではなく、梅若丸の忌日という説明は後世の借用と見られる。３月１５日という日は、水難を恐れ、水神を祭るための日であったろうという。

梅若事（うめわかごと）　関東・東北地方にかけて、３月１５日をウメワカゴト・ウメワカサマといってまつる。木母寺の梅若忌の由来に類した故事の伝えが仙台などにもあり、またこの日を伝説上の人物の縁日として語り伝える所が各地に少なくない。この日のご馳走には餅をつく場合が多く、コトのもち（仙台付近）、梅若のナキモチ（埼玉県北足立郡）など呼んでいる。この日に厄病除けを行う土地（仙台附近）も見られ、水神様（栃木県安蘇郡）や弁天様（新潟県岩船郡）の祭日とされ、禊（みそぎ）に因む行事が行われるとともに、女性の祭に関係のある日ともされている。

梅若の涙雨　陰暦３月１５日の梅若忌に降る雨をいう。この日に降る雨は、天が梅若丸の悲しい最後をいたんで降らすのであろうと、世人が同情して呼んだもの。』

17.　「郷土の伝承」（宮城県教育会編）

『封内年中行事　三月十五日　梅若様又は疫病送と称して笹竹の枝股に餅をはさんで四百四病送れ送れと書いた紙を下げて、門前に送り後小川などに流したものである。

岩沼民衆行事　三月十五日コトーハカ祭「ゴト」の餅（草餅）を神に供える（藩祖公愛馬午頭

の故事に拠る。)」

注(1) 伝説上の少年。京都北白川吉田少将の子で、人買いにかどわかされ酷使されつつ、総武の境隅田川のほとりに来た時病死した。一方、愛児を失って発狂した母が、はるばる探し求めて来た時は、既に梅若の死後であった。里人はこれを哀れんで、梅若が死んだ場所に柳を植えて塚として弔らった。この塚は梅若塚と呼ばれ東京都墨田区向島隅田川町梅柳山木母寺の境内にある。この伝説は同寺の縁起となっている。中世社会によくあったらしい人買いの伝説である。梅若丸の命日を梅若忌として、4月15日(もとは旧暦3月15日)木母寺で大念仏が行われる。しかし梅若忌が梅若丸の供養のためであるというよりは、疫病神や悪霊を追い払う儀礼の行われた古い民間の節日の一つであるといわれる。梅若伝説を題材にした文芸作品は多く、謡曲「隅田川」、仮名草子「角田川〔すみたがわ〕物語」、近松門左衛門の浄瑠璃「雙子〔ふたご〕隅田川」、浮世草子「梅若一代記」、滝沢馬琴の読本〔江戸時代の小説の一種。よみほん〕「墨田川梅柳新書」、河竹黙阿弥の脚本「都鳥廓白浪〔みやこどりながれのしらなみ〕」等がある。

注(2) 良覚院丁片平丁入口に鎮座する。もと追廻にあったのを、明治18年現在地に移したものである。創祀の年月不詳、「五島が墓」「ごとはかさん」といい、名馬五島を祭った社で、五島は政宗の愛馬であった。遠田郡不動堂の足軽町佐藤吉三郎宅にも馬上蛎崎神社があり、仙台の蛎崎神社の分霊を祀っている。旧領主後藤家の百姓(佐藤吉三郎の祖先)が名馬を政宗に献じ、政宗はこれに「後藤黒」〔=「五島」〕と名づけて愛していたという。仙台と同様の神事を行っている。

資料 仙台の方言(土井八枝)
仙台風俗志(鈴木雨香)
仙台(小倉 博)
仙台の年中行事(仙台市産業部編)
宮城県史第20巻
仙台市史第6巻
仙台伝説集(三原良吉)
緑の故里七つ森を語る(黒崎茗斗)
利府村誌(利府村誌編纂委員会編)
郷土の伝承(宮城県教育会編)